

特別寄稿

「きもの熱」の背景

清野 恵里子

私が生まれ育った町は上越の国境に近い沼田という城下町です。子供のころ、夏祭りの季節がやってくると馬喰町や東西の倉内町、鍛冶町などといった、かつて城下町であったことをしのばせる町からは、競ってお神輿や山車がくり出されます。裸電球があちこちにぶら下がった神社の境内には、金魚つりやヨーヨーつりに興じたり、屋台に並ぶハッカパイプやお面に見入る子供達があふれていて、小さい町ながら、おとなも子供もワクワクするような時間が流れていました。

周囲を何本かの川に囲まれ削られた台地、河岸段丘と呼ばれる地形の上に広がるこの町は、昭和25年生まれ私の10代の頃、まだ周辺の農村部に養蚕を営む農家も多く、畑にはたくさんの桑の木が植えられていました。

「キクとイサム」という文部省推奨の映画を町の映画館で見たのはまだ小学校の低学年の頃だったと記憶しています。米兵と日本人女性との間に生まれた混血の幼い姉弟と、養蚕を生業としてふたりを育てる祖母の物語でした。年老いた農婦を演じていたのはその頃まだお若かったのに、おばあさん役をよくなさっていらした北林谷栄さんでした。この映画の中に子供心に強烈な印象を残し今でも覚えているシーンがあります。モノクロームの画面だったと思いますが、カッと太陽が照りつけるような夏の日。「お蚕さま」に食べさせる桑の葉を摘みに出た3人が帰り道、夕立ちに会い、着ていたシャツを脱いで祖母の背負った桑の葉を入れた籠に被せるシーンです。桑の葉が濡れてしまっただけで蚕に食べさせることが出来なくなるとのことなのでしょう。当時、課外授業などで目にしたグロテスクな白い虫を「たいせつなお蚕さま」として認識したひとつの事件でした。

それから四十年ほどの時間が過ぎてしまいました。最近になり、私の生まれた町が、繭の集散地であったこ、町内には小さな製糸の作業場もあったことなどが思い出され、その工場の前を通りがかった折、鼻先をかすめた匂いまでふっと蘇って来たのです。

着物との出会いがすべての始まりでした。幼稚園に上がる前からお稽古ごとなどで着物を着る機会はとても多かったとはいえ、とにかくすべて母まかせ。何の興味もなかった私に訪れた転機となったのが、8年ほど前の母の死です。着物好きの母が残してくれたたくさんの着物の仕立て直しを機に一大変化が起きました。目の前の扉がずっと開いた感じでした。少々大仰な言い方になりますが、着物との出会いが、私がこの国に生まれ過ごした50年という時間をもう一度振り返らせてくれることになりました。

幼い日、まだ家電製品が一般の家庭に普及するには少々時間が必要で、もちろんクーラ

一など存在しない時代です。夏が近づけば、簾や蚊帳、花ゴザが登場し、流水で冷やした西瓜や麦茶、打ち水や風鈴の音に涼を感じることができる五感が健在でした。裏の軒先きに立て掛けられた張り板には家人が洗い張りした布が張られ、ふのりを溶かした小さなお鍋がちょこんと置かれています。物干し竿のはしっこに、白い木綿糸をよった紐で結んだ白足袋が裏返されてかかっていたり、割烹着の白さが眩しかったりと、着物が特別の日のためだけの装いでなく、日常の生活の中にもちやんと居場所があった時代でした。

終戦の年からわずか5年という昭和25年生まれ。いわゆる団魂の世代の尻尾です。小学校や中学校、過ごした学び舎は新校舎への移行の時期。小学校の社会科、中学校の地理の時間に先生が教えて下さることは「資源のない我が国。第二次世界大戦というそれまであじわったことのない悲惨な体験の経て、焼跡から復興した日本人の勤勉さと知恵がいかにか素晴らしいものであるか」ということでした。

・当時6年生の修学旅行で訪れた東京の町は、何年後かに控える東京オリンピックの準備で活況を呈していました。世の中は好景気に向かい、後戻り出来ないスタートをきったばかりの頃でした。「ものを大切に」という価値観はいつの間にか「消費は美德」へという大量生産大量消費の時代の趨勢に席を譲ってしまったかのようなようでした。それからずいぶん時が過ぎ、気がついてみれば、誇り高かった日本人はすっかり姿を消し、自信をなくし疲弊したみじめな姿を晒しているように見えます。高度成長と言う美名のもとに私たちが簡単に手放してしまったもの。着物と向き合うようになったことで、思わず見えた現実。小物が作ってくれたたくさんの出会いやご縁がきっかけとなって、いまこの国から失われて行く運命にある先達たちの遺産を目にすることになりました。素晴らしい工芸品の数々。それを生み出す職人さんたちの技術から、それをささえる道具、素材など、気がついてみれば、そのどれもが瀕死の状態に喘いでいました。そして何よりも重傷なのが私たち自身の弱体化してしまった精神と肉体。ほんとうにおいしいものを美味しいと感じ、美しいものを美しいと感じる健康な感覚をもう一度取り戻さないかぎり、今私たちが直面している危機を乗り越える術はないように思ってしまう昨今です

せいの・えりこ

群馬県生まれ。中央大学法学部卒業。

株式会社イリエ代表。随筆家。

きものの世界に急接近した数年前より長いブランクのあった謡や仕舞の稽古を再開。

著書に『樋口可南子のきものまわり』（集英社刊）

雑誌「メイプル」（集英社刊）に「きもの熱」連載中。